

的にみて、市には多く農村には少ない。もっとも市と農村では各種条件が異なるので当然のことかも知れないせめてブックモビールの巡回地域だけでも、もう少し読書会の育成を押し進める必要がある。そこで、今年度は極力ブックモビールの駐車場管内にある公民館や利用団体に働きかけた結果、信夫、伊達コースで8安達コース1、岩瀬コース2の読書会が結成された。この読書会の運営は、主体となる青年層が最近現金収入の道を求めて、農閑期を利用し都会や近接地区の町工場、会社に出稼ぎにいく傾向がでてきている。そのため、活動期とみられる時期に却って活動が低下し、現に今まであった読書グループでも解散寸前にあるというものも若干でてくるようになった。

このような状態の中では、読書会の調査も的確にその数を把握することは容易でない。しかし図書館としてもこの実態を掌握して、すべての運営の基礎資料に資する必要があるので、明年度は特にこの点について強力な措置を講じたい。その対策として考えられることは、県教委出張所と地教委の協力をお願いして、常に管内の読書会の動静（結成、解散）の実態を把握して戴く一方、育成については積極的な働きかけと指導助言を依頼するようにしたい。

このようにして、各地域における読書グループ育成の基盤を作るとともに、県立図書館としても読書会のリーダーとなる人々の養成については、講師を派遣するとか、講習会を開催するとかしてその育成をはかっていきたい。

今年度もこの趣旨にそって3月20日には福島市公民館と共催のもとに市公民館で、今年度の読書会リーダー講習会を開催したが、講師には作家の畔柳二美氏を招いて「これからの生活と読書」の講演を実施し、リーダーの養成に努力している。

別表5 県下の読書会結成状況
(昭和35年9月現在)

市 郡 別	読 書 会 数	会 員 数
福 島 市	62	575
会 津 若 松 市	20	322
郡 山 市	51	2,042
平 市	4	51
白 河 市	28	605
原 町 市	2	131
須 賀 川 市	4	69
喜 多 方 市	4	53
常 磐 市	15	91
相 馬 市	15	250
内 郷 市	9	89
勿 来 市	5	70
信 夫 郡	22	431
伊 達 郡	60	1,199

安 達 郡	3	53
安 積 郡	3	55
岩 瀬 郡	14	254
南 会 津 郡	7	114
北 会 津 郡	2	30
耶 麻 郡	4	122
河 沼 郡	1	23
大 沼 郡	1	36
西 白 河 郡	4	96
石 川 郡	2	55
田 村 郡	20	338
双 葉 郡	7	85
相 馬 郡	4	132
合 計	373	7,371

5 読書感想発表会の実施状況

従来の読書は、一般的に個人読書が慣習となっていた。しかし最近では前記にもあるように集団読書という形態で読み仲間をつくり、お互いに読後感を述べ合い、ものの見方、考え方についてそれぞれの角度から探し求める方法が最も理想的な方法といわれている。

この読書の在り方を普及する意味から考えて、図書館では毎年この読書感想発表会を実施しているが、今年度で10回目を数えるに至った。県下の8地区（福島、郡山、若松、白河、磐城、相馬、須賀川、田島）で県大会に出場する代表者を選び、2月18日にこの読書感想発表県大会を本館において開催したが、盛会裡に終了した。このことは所期の目的を達成したものであるとして今後この事業を継続実施すれば、その成果も年々向上するものと思われる。

6 館報「あづま」による図書館活動のPRと文化事業

およそ何事によらず事業を経営するに当たって最も必要なことは、その事業の内容、あるいは活動状況を一般大衆に徹底することが先決条件で、いわゆるPRの如何がその事業の成果に大きく影響するものである。ましてや図書館活動は比較的地味な存在で、一般大衆は関心を示さない傾向が強いようにみうけられる。

この傾向に対し、機会あるごとに移動図書館「あづま号」を利用し啓蒙を行ない、あるいは館報「あづま」を毎月発行し、また文化事業として、「著者と読書の集い」を開催する一方、新聞、ラジオ等のマスコミ機関にも働きかけてPRの展開に努めている。

(1) 館報「あづま」編集発行状況

館報「あづま」の編集に当たっては、まず、読まれる館報、読書グループの育成を主眼として、全国図書館の動き、本館が主体となつて行なう事業等を特集